

## ローマ人への手紙4章17-21節 「望みえない時の望み」

### 1A 無いものを有るものとして召される神 17-18

### 2A 義と認められた信仰 19-21

#### 1B 問題の透視 19

#### 2B 約束への疑いの拒否 20

#### 3B 神への栄光 20

#### 4B 実行する力 21

## 本文

ローマ人への手紙4章を開いてください。午後に4章を一節ずつ見ていきますが、今朝は、17節から21節に注目します。「<sup>17</sup>わたしはあなたを多くの国民の父とした」と書いてあるとおりです。彼は、死者を生かし、無いものを有るものとして召される神を信じ、その御前で父となったのです。<sup>18</sup> 彼は望み得ない時に望みを抱いて信じ、「あなたの子孫は、このようになる」と言われていたとおり、多くの国民の父となりました。<sup>19</sup> 彼は、およそ百歳になり、自分のからだですでに死んだも同然であること、またサラの胎が死んでいることを認めても、その信仰は弱まりませんでした。<sup>20</sup> 不信仰になって神の約束を疑うようなことはなく、かえって信仰が強められて、神に栄光を帰し、<sup>21</sup> 神には約束したことを実行する力がある、と確信していました。」

パウロは、3章において信仰による義を語り始めました。律法の行いではなく、イエス・キリストを信じる者が義と認められることを見ました。そこでパウロは4章では、もっと具体的に語ります。ユダヤ人であればだれもが知っている人、自分たちの父として敬っている人、アブラハムです。私たちキリスト者も、信仰の父として敬っているのですが、ユダヤ教徒たちは並大抵ではありません。

2016年に、イスラエル旅行に行った時に、私たちの団体は、イエメン系ユダヤ人家庭の安息日のお食事に招かれました。20名以上いる者たちに、ものすごいもてなしをしてくださいました。見も知らずの人たちに、どうしてそんなもてなしができるのだろうか？率直に、家の主人、シオンさんに尋ねたのです。シオンさんは、答えました。「アブラハムがもてなしたから。」すごいですね、すぐそばにアブラハムがいるかのように話すのです。そこまで身近で、肌感覚のある人物です。そこでパウロは、アブラハムの生涯において、自分の主張している信仰による義がどのように現れているのかを説明しています。

アブラハムの信仰の旅路は、すでに高齢になっているところから始まりました。75歳の時にカナンカナンの地に来ています。そして、「わたしは、あなたの子孫にこの地を与える。」という約束を与えておられました(創12:7)。ところが、何年も経っても、妻のサラは懐妊しません。サラも10歳年下ですが、高齢です。それでアブラハムは、「15:2 私は子がないままで死のうとしています。私の家の

相続人は、ダマスコのエリエゼルなののでしょうか。」と尋ねると、なんと神は、夜空の星を見せて、「あなたの子孫は、このようになる。」と約束されるのです(15:5)。神の約束もすごいです。それを信じるアブラハムもすごいです。「15:6 アブラハムは主を信じた。それで、それが彼の義と認められた。」神の途方もない約束を信じる、そのことが、神が義と認めるということを教えています。

ところが 86 歳になっても、まだ子供が生まれません。当時、不妊の解決法として代理母として、夫に女奴隷を与えるという方法がありました。サラは、女奴隷ハガルをアブラハムに与えました。それでイシュマエルが生まれました。ところが彼が 99 歳の時に、「これが、あなたと結ぶわたしの契約である。あなたは多くの国民の父となる。」と言われたのです(17:4)。そして、サラが「国々の母となる」と約束されました(17:16)。それで、アブラハムは焦ります。だって、イシュマエルが無事に与えられて、安泰だったのです。自分が 100 歳、妻が 90 歳にもなるのに、ちょっと無理でしょ、と思ったのです。けれども、妻サラが、男の子を産む。その子をイサク、「笑う」と名付けなさい、と命じられました。アブラハムが、神の約束があまりにも途方もないので、笑ってしまったからです。

けれども、彼の天幕のところに、三人の旅人が来ました。そして最高の食事でもてなします。そしてその一人が、もう約束します。「18:10 わたしは来年の今ごろ、必ずあなたのところに戻って来ます。そのとき、あなたの妻サラには男の子が生まれています。」この方、旅人のようでいて、実は主の使いであり、主ご自身だったのです。サラも、これを傍らで聞いて心の中で笑いました。けれども、「18:14 主にとって不可能なことがあるだろうか。」と言われるのです。アブラハムは信じました。サラに男の子が与えられ、来年の今頃には生まれていることを信じたのです。その時の様子を説明したのが、ここの箇所です。

### **1A 無いものを有るものとして召される神 17-18**

まず、アブラハムの信仰の中で、神が死者をよみがえらせる力のある方であることを信じている姿をパウロは浮き彫りにしています。「<sup>17</sup>「わたしはあなたを多くの国民の父とした」と書いてありとおりです。彼は、死者を生かし、無いものを有るものとして召される神を信じ、その御前で父となったのです。<sup>18</sup>彼は望み得ない時に望みを抱いて信じ、「あなたの子孫は、このようになる」と言われていたとおり、多くの国民の父となりました。」

アブラハムの子から、多くの国民が出て来るということ自体、信じがたいことですが、彼はその約束を受けていた時に、サラから一人の子も与えられていなかったのです。だから、何も無いところに、有るものとして呼び出す神をアブラハムは信じたのです。それは、死んでいるのにそれでも生かす神をアブラハムは信じていました。望みえない時に望みを抱きました。ここに、イエスを死者の中からよみがえらせたということを知る信仰に通じるものがあります。その信仰こそが、神によって義と認められるものなのです。

私たちには、いろいろな試練や、理解できないことが起こってきます。そこで大事なものは、信仰で

す。望みえない時に望むことです。イエス様がこの世に来られた時、紀元前後のユダヤ人の世界は、混乱と切迫の中にありました。ローマによって虐げられ、人々には地上における希望が失われ、メシアの到来を熱望していたのです。その中で、イエス様が死者の中からよみがえられました。望みえない時に希望を与えてくださいました。今、コロナ禍にあって希望を持たせないようなことがどんどん起こっています。けれども、その時だからこそ、アブラハムの信仰に倣えます。

## **2A 義と認められた信仰 19-21**

### **1B 問題の透視 19**

**19 彼は、およそ百歳になり、自分のからだですでに死んだも同然であること、またサラの胎が死んでいることを認めても、その信仰は弱まりませんでした。**

第一に、私たちが気をつけなければいけないことは、「困難や不可能に思えること」です。アブラハムは、私たちの考える困難や不可能によって神を押し量ることをしませんでした。

私たちは、日常生活の中で絶えず、何が容易なことで難しいことなのか、何が可能で不可能なのかを、判別しながら生きています。例えば、咳が出て、鼻水が出てきたら、「これは風邪かな？」と思います。それで、風邪薬を飲んだり、早めに寝たり、行動を取りますね。けれども、病院にいったら、CT や MRI 検査を受けたら、悪性の腫瘍が発見されたとお医者さんから言われました。これは、泣きたくなるほど辛いことです。前者の風邪は、自分で何とかできていると思っています。後者は、自分ではどうすることもできない、お医者さんでもできることしかできないと思っているので、絶望的になるのです。

これは人間ができること、できないこととして当然の判別です。けれども、問題は人間だからこそ行っている判別を、神に対して持っていくことです。自分たちにとって容易いことであれば、神にとっても容易いことだろうと思います。難しいことならば、神にとっても難しいと思ってしまう。そして、不可能なことは、神にも不可能なことだと思ってしまうのです。だから、サラが笑ってしまった時に、主の使いは、「創世 18:14 主にとって不可能なことがあるだろうか。」と言われましたね。こうやって、人間ができることできないことを、神にいつの間にか当てはめており、それは神を人間の限界のレベルに引き落としていることになるのです。

金持ちの青年がイエス様のところから悲しんで去っていったことを思い出してください。「マル 10:25-27 金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうが易いのです。」26 弟子たちは、ますます驚いて互いに言った。「それでは、だれが救われることができるでしょう。」27 イエスは彼らをじっと見て言われた。「それは人にはできないことです。しかし、神は違います。神にはどんなことでもできるのです。」らくだが針の穴を通るほうが、金持ちが神の国に入るより、まだ易いといエス様は言われるのですが、それも神にはどんなことでもできると言われます。

けれども、人間の限界を神に持ってしまうので、自分たちの方法で神がどうやって助けてくださるのか？と考えてしまいます。アブラハムが、自分から多くの国民が出ると言われた時に、イシュマエルがいたので、イシュマエルからそうなりますように願ったのですが、神はそれを拒まれました。女奴隷によって与えられた子によって祝福してくださいと願ったのですが、直接、自分の妻サラからその子が与えられることを願えばよいことなのです。神に直接的な願いを言うのではなく、神に指示するような祈りになってしまうのです。これは、もはや祈りではありません。

主はイザヤを通してこう言われました。「イザ 55:8 「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、あなたがたの道は、わたしの道と異なるからだ。——【主】のことば——9 天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。」自分がこれだと思っている道、方法は、まるで神のものとは異なっていて、神の思いは、天が地よりも高いように、私たちの思いより途方もなく高いのです。ですから、確かに、これは人間には不可能だと認めても、それで神への祈りをやめてしまうことは愚かなことなのです。アブラハムは、自分も妻も更年期をとっくの昔に迎えてしまったのを知っていながら、それでも神を信じました。

## 2B 約束への疑いの拒否 20

<sup>20a</sup> 不信仰になって神の約束を疑うようなことはなく、

第二に、神の約束を疑うようなことをしない、ということです。私たちは、いとも簡単に神の約束を疑ってしまいます。必要に事欠く時に、次の約束から離れて、揺らいでしまうことはないでしょうか。「ピリ 4:19 また、私の神は、キリスト・イエスの栄光のうちにあるご自分の豊かさにしたがって、あなたがたの必要をすべて満たしてください。」ところが、ここから揺らいでしまいます。こちらはどうでしょうか？「ロマ 8:28 神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています。」すべてのことではなく、良いことだけが働いて益となると、信じてしまいますね。悪いことが起こると、揺らいでしまいます。

旧約聖書で、神の約束を疑った、大きな教訓となる話があります。列王記第二 6-7 章です。そこに、北イスラエル王国の都サマリアが、アラム軍によって包囲された話があります。その中で食糧不足が起こって、粗末な食べ物がとんでもない高価な値段で売られていました。可哀そうなことに、あまりもの空腹で、女たちが生まれて来たばかりの赤ん坊を食べてしまっているというほどの飢餓状態でした。王は、預言者エリシャのせいだとしたのです。一人の者を遣わしました。エリシャは彼に対して、こう言いました。「7:1b【主】のことばを聞きなさい。【主】はこう言われる。『明日の今ごろ、サマリアの門で、上等の小麦粉一セアが一シェケルで、大麦二セアが一シェケルで売られるようになる。』」ところが、遣わされた者はこう答えます。「7:2b たとえ【主】が天に窓を作られたとしても、そんなことがあるだろうか。」そこで、エリシャは言った。「確かに、あなたは自分の目でそれを見るが、それを食べることはできない。」この男は、そんなことはあり得ない、と主の約束を疑いました。

ここで大事なのは、エリシャの回答で、「確かに、あなたは自分の目でそれを見るが、それを食べることはできない。」ということです。

そして、それがどのように実現するのか？先ほど、主の道は、私たちの道を異なるって聞きましたよね。主が用いられるのは、なっ、なんと、らい病人なのです。サマリア城内から出て来る生ごみで生きていた、らい病人四人です。中で食べ物がないのですから、ゴミも出てきません。それで自分たちはこのままだと死ぬことははっきりしていました。それで、「アラムの陣営に入り込もう。」と言うのです。生かしておいてくれるなら、生き延びられる。けれども、もし殺すなら、それまでのことだと言いました。そうです、アラムの陣営に行って殺されるかもしれません。でも、ここにいたら確実に死ぬのです。それで言ったら、彼らの声を、主がなんと、戦車の響き、馬のいななき、大軍勢の騒ぎに聞こえさせたのです。それでアラム兵は一目散に逃げました。そこには、大量の食べ物と、金銀や衣服もありました。彼らは貪って食べましたが、それは良くないと思い、イスラエルの王に伝えに行ったのです。はたして、彼らの言っている通りでした。それで、それを大量に人々がサマリアの城内に持ってきたので、「サマリアの門で、上等の小麦粉一セアが一シェケルで、大麦二セアが一シェケルで売られるようになる。」と言う言葉がその通りになったのです。

そして、「たとえ【主】が天に窓を作られたとしても、そんなことがあるだろうか。」と言った人がいますね。彼は、門の管理を王から任されていたが、人々がわんさと押し寄せてきたので、門が倒れて、その門の下で押し潰されてしまったのです。つまり、その潤沢に食べ物が売られているを見ながらにして、死んでしまったのです。つまり、ここから何が分かるか？人の不信仰で、神の約束が無効になることはありません。人は信じなくとも、神の約束は実現するのです。しかし、不信仰の問題は、その約束を自分のものにするにはできない、ということです。神の約束を不信仰によって疑うことの代償であります。

### 3B 神への栄光 20

<sup>20b</sup> かって信仰が強められて、神に栄光を帰し、

第三にアブラハムがしたことは、信仰が強められて、まだ約束が実現していない時から、神に栄光を帰していたということです。つまり、約束についての兆しや証拠がないのに、そのうちに神に賛美を献げた、ということです。

この時の状況を想定してみましょう。私たちが今、紀元前 1900 年頃のヘブロンにきました。そこに、天幕が張られていて、その天幕の前におじいさんが、樅の木の下に涼んでいます。私たちも、休んでいきなさいと呼びかけます。それで、彼がいろいろ話すのですが、「ハレルヤ」と話すの節々に出て来るのです。なんで、そんなに喜んでいるのか私たちは興味を抱きます。奥さんに、赤ちゃんが生まれるとのことです！

けれども、どう見ても、かなりの高齢のおじいさんです。尋ねると、なんと百歳です。では、奥様は？と恐る恐る聞くと、なんと90歳です。お子さんは今まで生まれたことがあるのですか？と尋ねると、奥様は一度もないとのこと。でも、妊娠したんですよね？と尋ねると、いいや、まだ妊娠していないと答えます。私たちはその場を立ち去ります。「ああ、おじいさん、ちょっとかわいそうだね。でも、幸せだからいいか。」と言い合っていました。

このような状態だったのです。まだ約束が実現していないのに、信仰が強められていて、その中で、約束の実現を見ていて、すでに賛美を献げています。詩篇には数多く、そうした内容があります。敵に囲まれているのに、主に呼び求めると、その聖なる山から答えて下さり、敵がまだ周りに変わりなくいるのにもかかわらず、「身を横たえて眠り、また目を覚ます。」とあるのです(3:5)。まだ、かなえられていないのに、それでも祈りが聞かれて、そのまま感謝し、賛美を献げています。使徒ヨハネが言いました、「Iヨハ 5:14-15 何事でも神のみこころにしたがって願うなら、神は聞いてくださるということ、これこそ神に対して私たちが抱いている確信です。15 私たちが願うことは何でも神が聞いてくださると分かるなら、私たちは、神に願い求めたことをすでに手にしていると分かります。」すでに手にしているのです。

イエス様は、向こう岸に渡ろうと言われて、弟子たちと舟に乗られました。そして、激しい突風が起こって波が舟の中に入ってきました。ところが、イエス様は「船尾で枕して眠っておられた。」とあるのです。そうです、向こう岸に渡ろうと言われたのですから、そこに留まって休んでおられたのです。神の言われることは、そのままその通りになるのですから、そこに安んじるのです。

#### 4B 実行する力 21

**21 神には約束したことを実行する力がある、と確信していました。**

第四に、アブラハムは、神には約束を実行する力があることを確信していました。神には力があります。その力は、雨が天から降って地面に落ちるかのようだ、と預言者イザヤは語りました。「イザ 55:10-11 雨や雪は、天から降って、もとに戻らず、地を潤して物を生えさせ、芽を出させて、種蒔く人に種を与え、食べる人にパンを与える。11 そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、わたしのところに、空しく帰って来ることはない。それは、わたしが望むことを成し遂げ、わたしが言い送ったことを成功させる。」約束したことは、神は実行する力があるし、その意志もあります。

いかがでしょうか、信仰をもってアブラハムは神から義と認められました。望みえないところで望むこと、何もないところで有るもののようにして呼び出す方を信じること。これが、神がイエスを死者の中からよみがえらせたことを信じる信仰です。山のように見える障害を、一気に平らな平野にするような、神の真実と恵みが現れます。最後に、エペソ人への手紙3章20節を読みます。「どうか、私たちのうちに働く御力によって、私たちが願うところ、思うところのすべてをはるかに超えて行うことのできる方に、..」願うところ、思うところをはるかに超えて御力を現わされる方です。